

戦争の犠牲者達

佐賀市

真崎 正俊

日本は同盟国ドイツの敗戦、サイパン島の玉砕と、戦局は日一日と敗色濃くなりつつあった。一方本土空襲も日ごと激しくなり、東京はじめ地方都市まで爆撃目標となり、一般国民まで犠牲者が急増していた。すでに制空制海権も連合国の手中にあった。本土との往来は途絶えており、「俺達はもう本土へは帰れぬだろうなあ」と戦友達と話し合っては、遙か本土を、故郷を偲ぶのであった。

そうした中で昭和20年7月上旬、陸軍特別幹部候補第1期生の一連の教育課程を終えて、旧満州南部（現中国の東北部）公主嶺の関東軍第2航空教育隊から、原隊復帰を命ぜられ、旧満州北部（現中国の北東部）ジャムスの関東軍第2航空第10飛行場大隊に復帰した。しかし、すでに飛行機は殆ど南方戦線に赴いて一機もなかった。かかる状況下、部隊ではソ連軍との地上戦に備えて、国境線沿いの飛行場の先端に、陣地構築の真最中であった。早速翌日から私共も朝1時間早起き、夕方2時間残業の突貫工事であった。昭和20年8月9日、深夜非常呼集のラッパが鳴り響いた。私達はソ連軍の侵攻を予測して緊急体制を整え命令を待った。しかし、正確な情報がなかなか得られず、私達は何をすればよいのか無我夢中であったように思う。命令が来たのは翌日の午後であった。「ソ連軍が日ソ不可侵条約を一方的に破って侵攻、国境警備隊と交戦中、緊急態勢を整えるべし」であった。日頃手にすることのなかった小銃と弾丸120発を受取って、押し寄せてくるであろう戦車を主力とするソ連軍を迎え撃たねばならなかった。

昭和20年8月13日、軍司令部の命令でジャムスからハルピンへ向かう日本軍輸送最後の列車に、夜も更けてからやっと乗り込んだ。我々の部隊は一旦ハルピンの予定防衛線まで後退して陣容を整えることであった。動き出した列車の中でいつの間に眠ったのであろう。横の戦友にゆすられて目を覚ますと、列車は止まっていた。何事だろうと周囲を見回していると、下の方から「兵隊さん、助けて下さい」と叫ぶ女性の声がした。見ると、女性と子供十数人の一団が私達を見上げている。「どうしたんですか」と尋ねると、ここから十数kmの所にある開拓団の人たちで、きのう、武装した暴徒に襲われ、着のみ着のまま逃れてきたという。他の人達とは途中バラバラになったとのことだった。いつの間にか戦友達が立ち上がって「さあ、早く乗りなさい」と言って、手を差しのべて貨車に乗せてやった。ありがとう、ありがとうと泣きながら、礼を言う老婦人や、母の手をしっかりと握って放そうとしない幼児達。この人達を乗せて良かった。しかし、ここまで辿り着けなかった人達は、今どうしているのだろうか。この後には列車は無いはずだが…と、貨車の中で言いようのない胸の痛みと憤りを覚えた。どうして国は、軍部は、この人達を早く助け出さなかったのか、第一線で銃を取るわれわれはそれなりに覚悟もできているが、その守られるべき婦人、子供、老人達が見捨てられ、暴徒などに襲われ、

死の淵に追い込まれている。次の駅も次の駅も、日本の避難民で悲愴な空気に包まれていた。われわれの列車は見る間に超満員となった。屋根のない貨車の側板からあふれるばかりである。これ以上どうしても乗せることはできない。哀願して泣き叫ぶ女性、「子供だけでも」と幼児を差し上げて泣く母親、貨車にすがりつく老婦人、軍隊だけの戦いならまだしも、何も知らぬ子供まで巻き込んだ悲惨な戦争。不可侵条約を一方的に破って侵攻してきたソ連軍に対し、強い怒りを覚えた。われわれには彼女たちを救う何の力もなかったが、何とかしてやりたい気持ちで一杯であった。

天皇への忠誠心とは遥かに遠い感情であった。しかし、われわれは作戦行動中であり、軍律を乱すことは許されなかった。あの時の情景は今も脳裏から消えず、思い出すたびに胸が締めつけられる。私達はソ連軍と一戦も交えることなく戦争は終結し、日本政府の命令によりソ連軍の武装解除を受け、旧満州の海林収容所に収容されて帰国命令を待った。

大陸の冬は疾走してくる。10月に入れば木枯しが叫び、寒さが身にしみてくる。ある日のこと、日本人はウラジオストックから送還というソ連側の情報に、兵士達は小躍りして喜んだ。部隊の編成替えがあって千人単位の大隊が編成された。彼らを信じて旧満州の牡丹江で乗り込んだ列車は、旧満州北部のソ連との国境スインフィン川を渡り、シベリア鉄道に入った。しかし、しばらくして逆方向に進んでいるのに気づいたときには、速度を上げてシベリア奥地に向かっていた。われわれはだまされていたのだ。日本人が最も恥としていた捕虜になっている。

ばく進する貨車の中でわれわれは歯ぎしりして悔しがった。なるようになれとやけになりながらも、兄弟のような特幹の戦友が二十数名まとまっていたことは非常に心強かった。昭和20年11月2日、シベリア鉄道のタイセット駅から分岐して、北東約50km地点のキビトックという小さな駅に降り立った。寂りようとして霧氷に覆われた森林と雪以外は、何も見えなかった。日暮れの山道を数km登った山腹に丸太を組んだ高い柵が巡り、その内外に更に鉄条網を張り巡らし、四隅には望楼がそびえ、狙撃銃を構えた監視兵が目を光らせ、下では軍用犬が四隅を固めていた。その中に丸太積み建物の建ち並び、酷寒の山嵐が吹き荒れていた。ここに約3000人収容された。まさに重罪人の牢獄だ。来る日も来る日も厳しい現実だった。

極寒気に夜具一枚もない冷たい受け入れ態勢と、食糧や水の極めて乏しい状況下に栄養失調者が続出、パラチフスも蔓延し、同胞達はばたばた倒れていった。2、3ヶ月の間に1000人以上死亡したと思う。

失望、落胆、そして底知れぬ不安で収容所内は暗く打ち沈んでいった。それでも我々は祖国帰還のかすかな希望の灯をともしながら、伐採、搬出、建築、車道や鉄道建設等の開発作業に人跡未踏の松や白樺の雪深い原生林深く分け入り、重労働に塗炭の辛酸を舐めながら、4年の歳月を送ったのである。

故郷から断絶され、共産主義思想を強要される環境の中で、自由な表現もできない抑留者達がたとえソ連を支持したとしても、誰も責めることはできない。当時の赤裸々な歴史であり、抑留者達が乗り越えてきた苦難の道であった。シベリア抑留とは、抑留者達が流した血と汗と

涙で綴られたシベリア開発史と言えよう。私はキビトックから117km地点で帰還命令を受け、昭和24年秋、舞鶴港に上陸することができた。これはひとえに厚い友情で結ばれた戦友間の固い絆とシベリア住民の温かい励ましがあったからである。

願わくば故郷を恋いつつ死んでいった6万2000人余の遺骨が祖国日本に帰り着く日の一日も早からんことを祈るや切である。